

進路選択状況調査報告（Ⅲ）

看護学校3年生の職業に関する意識および将来の計画

松 本 純 平

岡 本 英 雄

内 容

I 調査のねらい

II 結 果

III ま と め

I 調査のねらい

1 本研究全体の構想（再掲）

本研究全体の構想については、第1回の報告（「進路選択状況調査報告」日本看護協会調査研究報告 No. 4, 1977）において、「調査のねらい」の章ですでに述べたとおりである。その要点をあげれば、ある年度入学の看護学生を調査対象として、看護学校1年入学時点と3年生の進路決定時期の2時点で質問紙調査するといういわゆる縦断的な調査方法を採用し、看護学生を、日々「看護学生たらん」とし、将来「看護婦等の職業に就こう」としている動的な存在として、その意識や行

動を、特に進路選択に関連するさまざまな要因とのかかわりの中でとらえてゆこうとするものである。別な言い方をすれば、単に看護学生は看護婦になるもの、看護学校は看護婦への予備校としてとらえるのではなく、近年、教育、職業指導、職業心理学などの分野で注目されている「キャリア発達」あるいは、「職業的社会化」という視点から、看護学生を、進路探索期、キャリア形成期にある青年としてとらえてゆこうとするものである。より具体的なイメージで表現すれば、看護学生が看護婦になるということは、看護教育の過程の中で選択された一つの結論であって、それは入学した時点ですべてがその結論に向かって決められてしまうわけではない。それは感受性に富んだ青年期において過ごす看護学校での日々の生活を通して、より安定し、より個性的になってゆくキャリ

まつもと・じゅんぺい／雇用職業総合研究所職業指導研究部
おかもと・ひでお／上智大学文学部

ア発達のプロセスの中で、卒業時に選ばれる具体的な進路の一つととらえるべきである。看護学校におけるキャリア発達のプロセスは、大学や短大において同時期を過ごす青年に比べれば、平坦なものとは言えないであろう。いくつかの危機があり、それをのりこえる中で、看護学生はキャリア発達をとげてゆくのであろう。そういう実態をとらえることが本研究のねらいである。さらに、こうした観点から得られた調査結果から、最終的には、現代社会の職業観の変化、学生の価値観の多様化などを前に、その在り方を問われている現代職業教育機関の一つとしての看護学校の看護教育に対して、そしてまた、学歴社会批判を背景にさまざまな問題を指摘されている中学校や高等学校における進路指導、キャリア・ガイダンスに対して、ささやかな問題提起を行なうということもねらっている。

2 本報告の位置づけ

本報告は、第2回調査(看護学校3年時に実施)分のうち、前回報告(「進路選択状況調査報告(Ⅱ)」日本看護協会調査研究報告 No.12, 1980)に含まれなかった「職業に関する意識」と3年生時点

での「将来の進路計画」に関する状況および「看護教育に対する態度・意見」についての結果をとりまとめたものである。また「まとめ」では、「看護婦＝聖職」観の変化ということを手がかりに専門性の獲得過程について、また、学生達の看護教育への不満などを手がかりとして看護教育のあり方について2, 3の考察をした。

3 調査の内容

調査票の構成、方法などについては前回の報告にあるので省略する。なお、調査対象者の構成は表1のとおりである。

表1 調査対象者

学 校 名	1年時有効回答数	最終分析対象数
1 国立A病院附属看護学校	35	30
2 国立B大医学部附属看護学校	39	38
3 C逓信病院高等看護学校	38	32
4 都立D //	126	109
5 都立E //	69	61
6 私立F大病院併設看護学校	39	38
7 私立G大医学部附属看護学校	82	43
8 私立H医大併設看護短大	59	39
9 I 日赤短大	46	42
10 国立J大特別教科看護教員養成課程	17	17
計	550	449

II 結 果

1 3年生時点での職業に関する意識の状況

第2回目の調査が行なわれた3年生の秋の時点で、看護学生達が学生生活について考えていること、看護婦に対して抱いている考え、進路設計をめぐって考えていることを整理してみたい。

1) 全般的な状況

看護学生として全般的な意識を、①看護学生としての誇り、②現在の生活に対する満足感、③生活において重視していること、の3つの視点からとらえてみた。

① 看護学生としての誇り

「あなたは、現在あなたが看護学生であるとい

表2 看護学生であることの誇り ()内%

	1年時	3年時
誇りをもっている	218 (48.6)	160 (35.6)
どちらともいえない	210 (46.8)	256 (57.0)
誇りをもっていない	18 (4.0)	27 (6.0)
無回答	3 (0.7)	6 (1.3)
計	449 (100.0)	449 (100.0)

うことに誇りをもっていますか」という質問をし、「誇りをもっている」など表2に示される3つの選択肢を用意した。誇りをもつかという問いは、次の節で取り扱われる満足感よりも、現状に対するより積極的な態度を問うことになろう。なぜなら、誇りをもつと答えることは単に満足して現状肯定的であるというよりは、むしろ自分の役割を積極的に引き受け、そこで生ずるかもしれないさまざまな課題にも前向きに取り組む姿勢を感じさせるからである。

結果は「誇りをもっている」と肯定的な者が全体の35.6%、「誇りをもっていない」と否定的に答えた者が6.0%を占めたが、最も多かったのは、「どちらともいえない」で、全体の57.0%の学生はこの選択肢を選んでいる(表2参照)。

回答状況を学校別にみると、学校による違いがみられた。すなわち、「誇りをもっている」が5割を超える学校がある一方、「どちらともいえない」が、7割を超える学校、あるいは、「誇りをもっていない」という学生の割合が、「誇りをもっている」という学生の割合よりも多い学校もみられた。

また、1年生の秋の時点ですった第1回調査結果と比較してみると、1年生の時は、「誇りをもっている」が全体の48.6%、「誇りをもっていない」が4.0%、「どちらともいえない」が46.8%であるので、2年の間に、「誇りをもっている」

学生の数、かなり減少していることがわかる。この点をもう少し詳しくみてみると、1年時点で「誇りをもっている」と答えた学生のうち、50.5%は、3年時点でも「誇りをもっている」と答え、43.6%は、「どちらともいえない」へ変わり、4.6%は、「誇りをもっていない」へと変わっている。1年時点で、「どちらともいえない」と答えた学生の3年時点での回答を同じようにみると、71.0%は、「どちらともいえない」と変わらず、21.0%は、「誇りをもっている」の方へ、7.1%は「誇りをもっていない」の方へ変わっている。1年時点で、「誇りをもっていない」と答えた学生は、全体の4.0%、実数で18名であるが、2年たっても変わらず、「誇りをもっていない」という者は、2名と少なく、4名は、「誇りをもっている」の方へ、12名は、「どちらともいえない」に変わっている。これらの変化の様子を細かくみると、誇りという点からいえば、約4割ほどの学生が、考えをなんらか変えたことになるが、極端に変わった者は14名で、非常に少ないといえよう。

② 現在の生活に対する満足感

「あなたは全体として、現在の生活に満足していますか」という問いで、生活満足感を尋ねた。選択肢を「たいへん満足している」から「全く満足していない」まで5段階用意したが、結果は、表3のとおりであった。

最も多くの学生から選ばれた選択肢は、「あまり満足していない」で全体の35.9%を占め、次いで、「まあ満足している」33.6%、「どちらともいえない」25.6%の順になっている。「たいへん満足している」および、「全く満足していない」という両端の選択肢は、それぞれ1.3%および3.6%と選ばれる割合は少ない。全体をみると、どち

表3 生活満足感 ()内%

	1年時	3年時
たいへん満足している	17 (3.8)	6 (1.3)
まあ満足している	203 (45.2)	151 (33.6)
どちらともいえない	114 (25.4)	115 (25.6)
あまり満足していない	100 (22.3)	161 (35.9)
全く満足していない	13 (2.9)	16 (3.6)
無回答	2 (0.4)	— (—)
計	449 (100.0)	449 (100.0)

らかといえ、不満の方に分布が偏っている。

この結果を2年前と比較してみよう。1年時点の生活満足感では、「まあ満足している」が45.2%と多くを占め、「たいへん満足している」も3.8%と3年時の3倍の者が選んでいて、全体からみると、満足の側に偏った分布をしていた。これらから、この2年間に生活全般に対する満足感は、満足から不満の方向に変わったといえよう。1年時と3年時をクロスさせてその辺を詳しくみてみると、次のようなことがわかった。「たいへん満足している」「まあ満足している」を満足群、「どちらともいえない」を中間群、「あまり満足していない」「全く満足していない」を不満群として、この2年間の変化をみてみると、全く変化がなかった者は全体の45%位を占め、残りの55%は、生活満足感において変化を示していた。1年時に満足群だった者をみてみると、45%は変わらず、26%は中間群に、29%は不満群へと変わっている。1年時に中間群だった者についてみると、30%は同じく中間群、31%は満足群へ、38%は不満群へ変わっている。同様に1年時不満群をみると62%は相変わらず不満群、19%は満足群へ、残りの19%は中間群へと変わっている。これらの変化をまとめると満足群から不満群へ、また逆に不満群から満足群へと反対方向へ変化している者

は、全体の19%と2割近くを占めていること、1年時に満足群にあった者と不満群にあった者とを比べると、不満群の方が、この2年間に変わることが少ないというようにわかる。

また、3年時の生活満足感について学校別に整理してみると大きな学校差がみられた。生活満足感を満足群・中間群・不満群と3分類してみたとき、全体としては、不満群の割合が満足群よりも高いという結果であったが、個々の学校によっては、5割近い学生が満足群の学校、あるいは中間群が少なく、満足群と不満群それぞれが多い学校、不満群が5割から6割を占める学校などがみられた。

③ 生活において重視していること

看護学生の学生生活は、いうまでもなく、基本的には一人前の看護婦になるためのさまざまな修業を中心に展開されている。そしてすでに第1回目の調査でも確認されたし、常識となっていることではあるが、これらの修業の厳しさ、あるいは過密さは看護学生の学生生活に大きな負担となつてのしかかっている。「時間が足りない」「つめ込み式だ」「人間性を育てるような教育を」等々学生が示すこれら看護教育に対する要望は、その事情を示すものである。

ところで、生活時間の配分としてみたら確かに看護学生の生活の多くは、看護婦になるための専門的な修業に費されているには違いないが、発達的にみれば、学生時代は、思春期に育み開花させたさまざまな対象への興味や関心を、具体的な試行的行動を通してわが物にしてゆく時期とすることができる。そこで、第2回調査には、看護学生がどのような分野に関心を寄せているかについて調べるための項目をつけ加えた。

質問は、「あなたは、現在の生活において、次

進路選択状況調査報告（Ⅲ）

表4 生活において重視していること

単位：％

	大いに重視している	わりと重視している	どちらともいえない	あまり重視していない	全然重視していない	無回答
1 身体や健康に関すること	30.7	48.8	12.5	7.6	0.4	—
2 学業や実習に関すること	21.6	60.4	14.9	2.9	0.2	—
3 進路に関すること	28.5	48.6	17.1	3.8	1.3	0.7
4 家族に関すること	28.5	45.9	16.9	7.1	1.3	0.2
5 友人に関すること	23.4	53.9	18.3	3.3	0.7	0.4
6 恋愛や結婚に関すること	17.4	29.6	31.6	16.5	4.9	—
7 レジャーに関すること	6.2	25.6	39.2	23.4	4.9	0.7
8 クラブ活動に関すること	4.7	11.4	25.2	27.6	30.7	0.4
9 政治に関すること	3.1	9.6	28.3	36.7	21.6	0.7
10 教養や趣味に関すること	17.1	48.1	24.7	8.9	0.9	0.2

の各項目について、どのくらい重視していますか」というもので、「身体や健康」「学業や実習」「進路」「家族」「友人」「恋愛や結婚」「レジャー」「クラブ活動」「政治」「教養や趣味」の10項目について、「大いに重視している、わりと重視している、どちらともいえない、あまり重視していない、全然重視していない」の5段階で評定することを求めた。

結果は表4に示されている。

「大いに重視している」という評定に注目して各項目をみると、「身体や健康」「進路」「家族」の順に割合が高く、それぞれほぼ3割位の学生が、これらの項目を重視していることがわかる。これに対し、「政治」「クラブ活動」「レジャー」については、「大いに重視している」とする者の割合が3～6％と低い。

次に、「全然重視していない」という評定に注目して各項目をみると、この評定をする割合が高い項目は、「クラブ活動」および「政治」であり他の項目に比べ圧倒的である。この2項目以外の8項目では「全然重視していない」という者の割合はたかだか数％と低い。

さらに、「どちらともいえない」を中間として、どちらかという「重視している」者の割合と、

どちらかという「重視していない」者の割合を算出して各項目の特徴をみると次のようなことがわかる。すなわち、「学業や実習」「身体や健康」「友人」「進路」「家族」「教養や趣味」の6項目では、重視する者の割合が非常に高く、重視しない者の割合が非常に低いこと。それに対し、「クラブ活動」「政治」の2項目では、重視する者の割合が低く、重視しない者の割合がかなり高いこと。「恋愛や結婚」および「レジャー」の2項目では、「どちらともいえない」という中間的評定をする者の割合が最も高く、強いて言えば重視する者の割合は高いのではあるが、重視する者と重視しない者の割合にそれほど差がみられないことなどである。

また、各評定に5から1までの数値を与え各項目間の相関を算出しそれを因子分析してみると3つの因子が抽出された。第1因子は因子負荷で見ると「身体や健康」「学業や実習」「進路」が高く、職業的活動あるいは専門教育活動と関連が深い因子とみられる。第2因子は、「友人」「恋愛や結婚」「レジャー」で因子負荷量が大きく、個人的活動・プライベートな活動と関連が深い因子とみられる。第3因子に関しては、「クラブ活動」「政治」「教養や趣味」の因子負荷が高く、社会

的な活動・社会参加的な活動との関連が深い因子とみられる。「家族」という項目は、第1因子と第2因子の両方に比較的大きい因子負荷量を示していた。

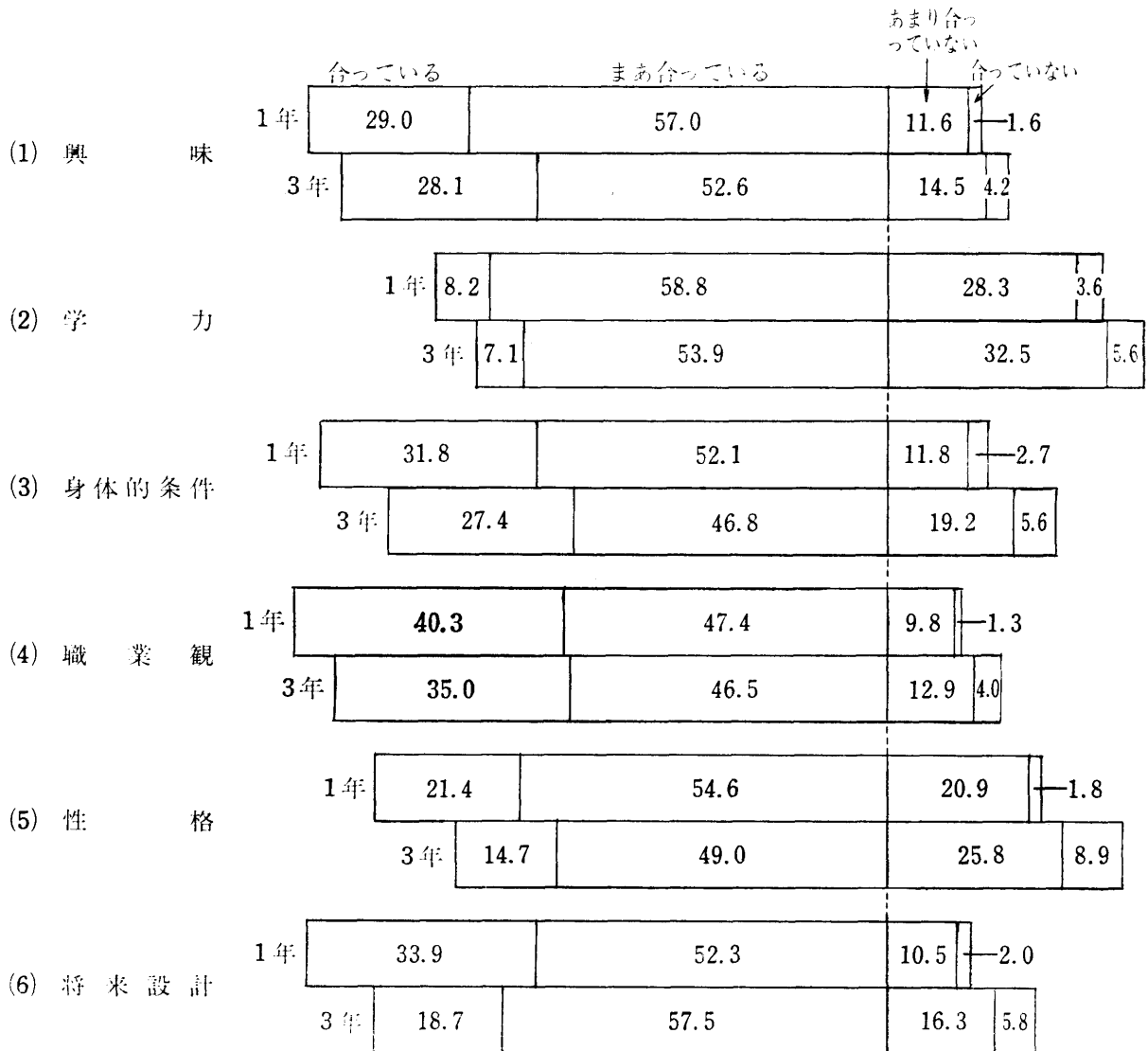
これらの結果をまとめてみると、次のようなことがいえそうである。すなわち、看護学生の学生生活に関する関心は、大きくは職業的な活動に関連する領域、個人生活に関連する領域、社会参加的な活動に関連する領域の3つに分けられる。そして、3つの領域の中では、職業的な活動に関連

する領域が最も重視されている。反対に、社会参加的な活動に関連する領域に対しては重視する者の割合はあまり多くはない。個人生活に関連する領域は、他の2つの領域に比べると中間位の関心が寄せられているが、そのことは重視する者もかなり存在する一方重視しない者もかなり存在していることを示している。

2) 看護婦に対する態度

看護婦に対する態度は、①適合性、②看護婦の職業イメージ、③自分の子供に看護職をすすめる

図1 看護婦との適合性についての評価



の3つの視点からとらえてみた。

① 適合性

「あなたは看護教育を受けている現在、自分自身と看護婦の仕事との関係をどのようなものと考えていますか」という質問の下に、「興味、関心」「学ぶ力」「体力や身体的条件」「仕事観・職業観」「性格」「将来設計」の6項目について、「合っている、まあ合っている、あまり合っていない、合っていない」の4段階で評定することを求めた。

結果は図1のとおりである。「合っている」という評定の多い項目は、「仕事観・職業観」(35.0%)、「興味、関心」(28.1%)、「体力や身体的条件」(27.4%)などである。逆に、「合っていない」という評定が比較的多い項目は「性格」(8.9%)、「将来設計」(5.8%)などである。「合っている」と「まあ合っている」とを合計し、適合性の評定において肯定的な者の割合を計算してみると、「興味、関心」および「仕事観・職業観」においては全体の約8割、「体力や身体的条件」および「将来設計」においては約7割、「学ぶ力」および「性格」においては約6割を占めることになり、項目により違いがみられた。

さて、第1回目の調査において得られた同一質問に対する回答と比較してみると次のようなことがいえよう(図1参照)。

第1に、どの項目においても「合っている」という評定をする者の割合が少なくなっていることである。第2に、そのような変化が項目によって少々違いがみられることである。特に「体力や身体的条件」「性格」「将来設計」においては他の項目より大きな変化がみられた。第3に、先にあげたような変化はみられるが、1年生の時の適合性評定と3年生の時のそれとを比較すると、各項目の肯定率の順位には大きな違いはみられない。第4に、

3年生においては、「合っていない」というハッキリとした否定的評価を下す者の割合がどの項目でも高くなっていることである。特に「性格」においては、1年生の時の5倍以上にのぼっている。

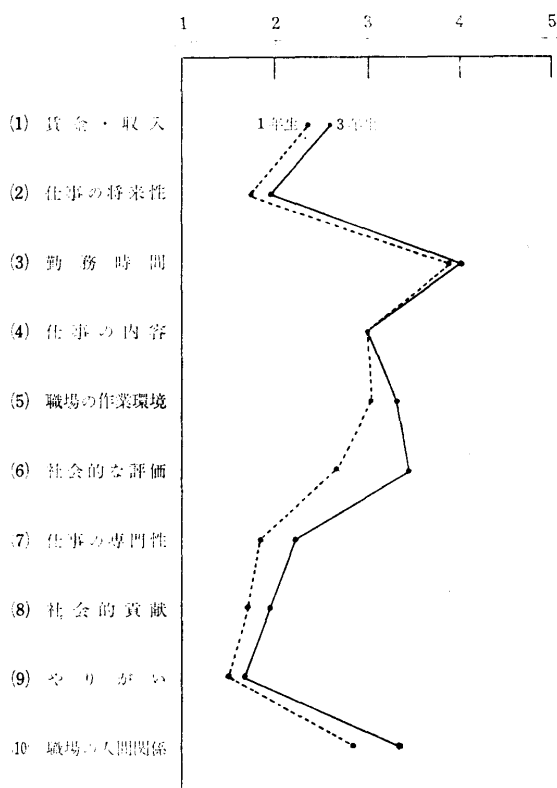
② 看護婦の職業イメージ

「あなたは、現在次の各点について看護婦という職業にどのようなイメージを抱いていますか」という質問の下に、「賃金・収入」「仕事の将来性」「勤務時間」「仕事の内容」「職場の作業環境」「社会的な評価」「仕事の専門性」「社会的貢献」「やりがい」「職場の人間関係」の10項目について、「++(良いイメージ)」から「--(悪いイメージ)」の5段階で評価することを求めた。

結果をみると、「++(良いイメージ)」の割合が最も高い項目は、「やりがい」で、全体の45.7%を占める学生が良いイメージをもっていることを示した。その他で良いイメージの高い項目は「社会的貢献」(31.2%)「仕事の将来性」(28.5%)「仕事の専門性」(22.9%)などである。一方、「--(悪いイメージ)」の割合についてみてみると、「勤務時間」という項目が36.1%の者によって悪いイメージと評価され、その割合は他の項目に比べ圧倒的に高い。次いで「社会的な評価」(15.4%)「職場の人間関係」(10.0%)なども相対的に悪いイメージをもたれていることがわかる。

全体の大まかな傾向をみるために「++(良いイメージ)」から「--(悪いイメージ)」までにそれぞれ1から5までの数値を与え平均値を求めプロフィールの形で描いたのが、図2である。これをみると、看護学生達が看護婦の職業イメージについて、「仕事の将来性」「仕事の専門性」「社会的貢献」「やりがい」などの点では良いイメージをもち、「勤務時間」の点では悪いイメージ、「賃金・収入」の点ではどちらかといえば良いイ

図2 看護婦の職業イメージのプロフィール

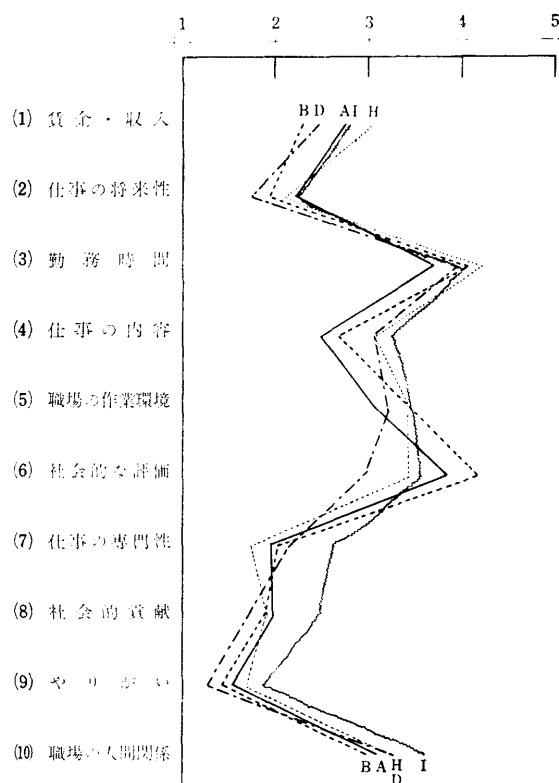


イメージ、「仕事の内容」についてはどちらともいえず、「職場の作業環境」「社会的な評価」「職場の人間関係」などの点ではどちらかといえば悪いイメージをもっていることを概観できる。

この調査結果と2年前の結果を比べてみると次のような傾向がみられる(図2参照)。すなわち、第1に、どのような点のイメージも程度の違いはあれ一律に悪いイメージの方にずれていること、第2に、その傾向は、とくに「社会的な評価」や「職場の人間関係」「仕事の専門性」などの点で大きいこと、第3に、平均的にみれば、「社会的な評価」と「職場の人間関係」の2つの点で良いイメージから悪いイメージの方に変わっていること、などである。

また3年時点で、各職業イメージを学校別にまとめてみると大きな違いがみられた。すなわち、

図3 学校別(A, B, D, H, I)看護婦の職業イメージのプロフィール



「職場の人間関係」の項を除いた9項目で、学校別にイメージ評定の分布が有意に違っていた(図3は、差の大きい5校を図示したもの)。

③ 自分の子供に看護職をすすめるか

「あなたは、将来自分の子供が看護職につきたいといったら、どのような態度をとるでしょうか」という質問をして、「ぜひすすめる、一応すすめる、どちらともいえない、あまりすすめたくない、決してすすめない」の5つの選択肢で回答を求めた。この質問は一種の投影法で、学生達の現在の看護婦に対する評価が回答に投影されるものと考えられる。

結果は、表5に示すとおりである。「どちらともいえない」が、55.2%と半数を超えている。次いで多いのが「一応すすめる」(20.7%)であり、「ぜひすすめる」と「一応すすめる」とを合計す

進路選択状況調査報告(Ⅲ)

表5 自分の子供に看護職をすすめるか()内%

	1年時	3年時
ぜひすすめる	45 (10.0)	31 (6.9)
一応すすめる	88 (19.6)	93 (20.7)
どちらともいえない	285 (63.5)	248 (55.2)
あまりすすめたくない	21 (4.7)	52 (11.6)
決してすすめない	8 (1.8)	22 (4.9)
無回答	2 (0.4)	3 (0.7)
計	449 (100.0)	449 (100.0)

ると27.6%とほぼ4人のうち1人以上の人が、現状に対し積極的な評価を下していることがわかる。

さてこの結果を1年時点のものと比較してみると、全体的には、「あまりすすめない」や「決してすすめない」の割合が多くなってゆく傾向を示している。両項目をクロスさせてみると、評価が大勢として変わらない者が約5割を占めている。しかし、評価を変えた者の中には、「すすめる」方から「すすめない」方に、あるいはその逆の方向に態度を180度変えた者が3%ほどふくまれている。

また回答の選択の状況を学校別に調べてみたが、この質問では統計的に有意な関連はみられなかった。

この質問は同時に、各選択肢の選択理由も自由記述法で求めているが、「どちらともいえない」を選んだ者の選択理由は、「本人の自由意志、本人に任せる」というような記述が圧倒的に多かった。また、「すすめる」という選択肢の選択理由としては、「やりがいがあるから、女性のもつ能力を生かせるから」などの記述がみられた。さらに「すすめない」という理由としては、「仕事の大変さ、つらさ、苦勞」に関する記述が多く、中には、「青春が苦しいものになってしまう。看護学生の灰色の青春は送らせたくない」という記述もみられた。

3) 進路設計をめぐる価値観

進路設計をめぐる価値観については、①職歴観、

表6 職歴観 ()内%

	1年時	3年時
不就業型	3 (0.7)	5 (1.1)
結婚・離職型	24 (5.3)	22 (4.9)
出産・離職型	38 (8.5)	32 (7.1)
継続型	158 (35.2)	163 (36.3)
育児期中断型	204 (45.4)	182 (40.5)
わからない	8 (1.8)	17 (3.8)
その他	13 (2.9)	28 (6.2)
無回答	1 (0.2)	— (—)
計	449 (100.0)	449 (100.0)

②仕事観・選職観、③聖職観の3つの視点からとらえてみた。

① 職歴観

女性の職業選択と職業経歴の展開には、男性と違い、結婚、出産というファミリー・ライフサイクルが大きな影響力をもっている。ここでは、女性の職業経歴の展開についての考え方を、「女性が職業をもって外で働くことについて世間にはいろいろな意見があります。下記の意見のうち、あなた自身の意見に一番近いのは何番だと思えますか」という質問をして、「1.女性は職業をもたない方がよい(未就業型)、2.結婚するまでは職をもった方がよい(結婚・離職型)、3.子供ができるまでは職業をもった方がよい(出産・離職型)、4.子供ができて、可能な限り続けた方がよい(継続型)、5.子供が小さいあいだはやめて、ある程度大きくなったら再就職する方がよい(育児期中断型)、6.わからない、7.その他」の7つの選択肢を示した。

結果は表6にみられるとおりで、最も多いのは、「育児期中断型」で全体の40.5%の者が選んでいる。次いで多いのは、「継続型」(36.3%)であり、ほぼ4人のうち3人までが比較的長期にわたる職業経歴を展開しようとしていることがわかる。

1年時の同様の質問項目と比較してみると数%の違いはみられるが大勢としてはあまり変化がみられない。両項目をクロスさせてもう少し詳しくみると、1年時に、「継続型」であった者のうち3年時にも変わらない者が53.2%、「育児期中断型」に変わった者が27.8%いる。また、1年時に「育児中断型」であった者のうち、3年時にも変わらない者が52.0%、「継続型」に変わった者が37.5%であった。さらに、1年時に他の型であっ

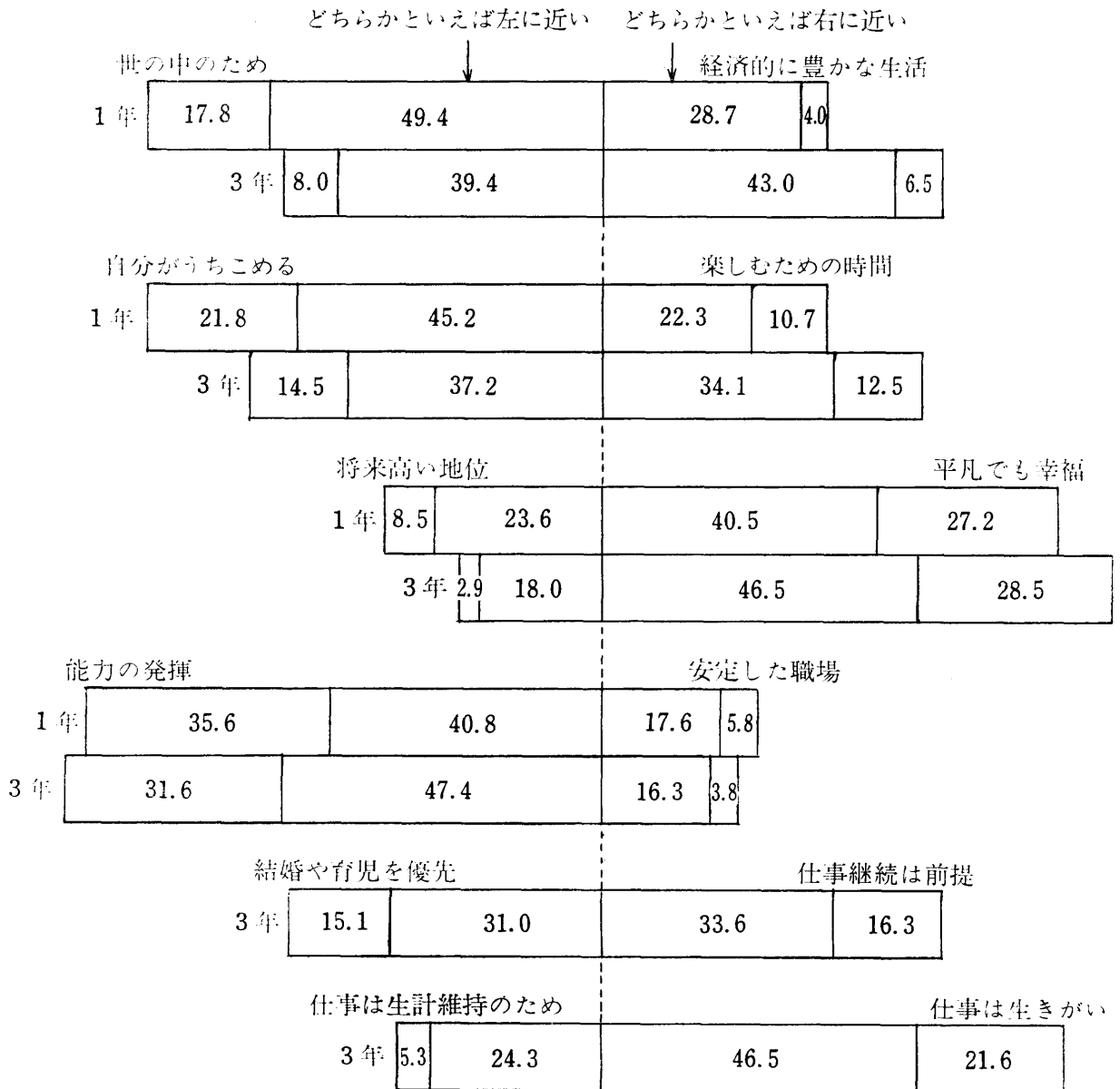
た者については、先の2つの型ほど安定性はみられなかった。

また、この職歴観は学校別に集計してみても、各選択肢の選択される割合に統計的に有意な学校差はみられなかった。

② 仕事観・選職観

仕事観・選職観としては、一対にして提示された仕事や職業に関する意見について、賛意の強さも含め、4段階で評定することを求めた。すなわ

図4 仕事観・選職観



進路選択状況調査報告（Ⅲ）

ち「1. 経済的にめぐまれなくても世の中のためになる職業につきたい vs. 世の中のためになることよりも経済的に豊かな生活ができる職業につきたい」「2. いそがしくてゆっくり楽しむための時間がなくても自分がそのことにうちこめる職業につきたい vs. 仕事はきまった時間内におわり、楽しむための時間を十分もてる職業につきたい」「3. 若いときにすこしは苦勞しても将来高い地位につける職業につきたい vs. 将来高い地位につけることより平凡でも幸福な家庭をつくれる職業につきたい」「4. 大規模な安定した職場でなくても自分の能力を十分に発揮できる職業につきたい vs. 自分の能力はたとえ十分に発揮できなくとも、安定した職場がよい」「5. 仕事より結婚や育児の方を優先させる vs. 仕事を続けることを前提に結婚や育児の問題を考える」「6. 仕事をするのは結局のところ生活して行くためにやむを得ないことだ vs. 仕事は人生の中で大きな生きがいだ」の6つの対となった考え方のどちらに近いかを回答するわけである。

結果は、図4のとおりである。

最も回答に偏りがみられるのは、「安定した職場」より「能力の発揮」できる職場を望むことであり、次いで、「将来高い地位」につくより、「平凡でも幸福」な家庭をつくれること、仕事は「生計維持のため」のものというより「生きがい」であるということなどが多く選ばれている。これらに対し、「世の中のため vs. 経済的に豊かな生活」「自分がうちこめる vs. 楽しむための時間」「結婚や育児を優先 vs. 仕事継続は前提」の組み合わせについては、個々の学生で意見が分かれてしまい、全体をほぼ折半したような分布となっている。

また、1年時にも調査した4項目についてみると、「能力の発揮 vs. 安定した職場」を除く

3項目では考え方がかなり変わっていることが示されている。

学校ごとにまとめてみると、「世の中のため vs. 経済的に豊かな生活」「仕事は生計維持のため vs. 仕事は生きがい」の2項目で統計的に有意な差がみられたが、他の4項目については差がみられなかった。

③ 聖職観

『看護婦は、一般の仕事と違い尊い職業だ』という意見がありますが、これはあなたの考えとどの程度一致していますか」という質問の下に、「ほぼ一致している、どちらともいえない、ほとんど一致していない」という3つの選択肢を用意して、聖職観を尋ねた。その結果は、表7のとおりである。

表7 「看護婦聖=職」観 ()内%

	1年時	3年時
ほぼ一致	160 (35.6)	96 (21.4)
どちらともいえない	231 (51.4)	268 (59.7)
ほとんど一致しない	55 (12.2)	85 (18.9)
無回答	3 (0.7)	0 (—)
計	449 (100.0)	449 (100.0)

59.7%と全体の6割近い学生は、「どちらともいえない」というハッキリしない選択肢を選んでいる。これに対し、21.4%が「ほぼ一致」、18.9%は「ほとんど一致しない」を選んでいる、ハッキリした考え方をもつ学生はそれぞれ同じ位の割合であることを示している。

1年時の同じ質問への回答の様子と比較してみると、「ほぼ一致」がかなり減少し、「どちらともいえない、ほとんど一致しない」を選ぶ者がそれぞれ増加している。両者をクロスさせて細かくながめてみると次のようなことがわかった。すなわち、1年時と3年時で選択した内容が変わらな

いは全体の54.7%を占めている。3つの選択肢のうち、2年たっても変わらない者の占める割合が高いのは、「どちらともいえない、ほとんど一致しない、ほぼ一致」の順で、それぞれ68.0%、50.9%、36.9%であり、1年時「ほぼ一致」とした者が変化する割合が高いといえる。「ほぼ一致」から「ほとんど一致しない」へあるいはその逆のように極端に意見の変わった者が全体に占める割合は4.5%で、それほど大きな数ではなかった。

また学校別に集計してみると、統計的にみて有意な差がみられる。すなわち、選択肢の選ばれ方により、一致者の割合が不一致者より多い学校、一致者の割合が不一致者より少ない学校、一致者と不一致者の割合が同じ位の学校に分かれる。たとえば学校Iでは、不一致者が一致者の6倍に達している。

2 将来の進路計画

3年生の秋の時点で、看護学生達は将来の進路についてどのような展望をもっているのだろうか。本調査では、これを大きく3つの視点からとらえようとした。すなわち、第1に、学生達は、学校卒業直後の進路をどのように予定しているのか、第2に、学生達は、一生の職業経歴というものをどのように考えているのか、第3に、学生達は、職場に入る際、選択の背景にどのような枠組をもっているのか、という3点である。第3点については、既に報告してあるので、次に前2点について結果を整理してみたい。

1) 学校卒業後の進路予定

看護学生達が看護学校卒業後の進路をどのように予定しているのかについては、「あなたは、現在、学校卒業直後の進路を、どのように予定していますか。例にならって、就職先・進学先などで

具体的な施設名まで候補としてあがっておりまして、それを含めて書いて下さい」という質問および、「都立〇〇病院に就職したい。小児科希望」などの例を提示し、自由に記述することを求めた。また、具体的な予定をたてている人については、その進路を決意した時期についても併せて回答を求めた。また、同様に自由記述法により、学校卒業後の進路を決める上で、重視したい条件を調べた。

① 卒業直後の進路

卒業直後の進路について書かれた内容をみると、例示してできるだけ具体的な記述を求めたこともあり、「Y大学教育学部養護教諭養成課程」「G県ガンセンター」「N県I市中央総合病院小児科」など、非常に具体的で明確な記述が多かった。この時期に、多くの学生が、はっきりと卒業後の進路予定をたてていることが示されている。表8は、具体的な記述内容を、「看護婦」「進学」「その他および無記入」に分けて整理したものである。なお、「進学」には、大学進学を志望する者が1名含まれている。また「その他および無記入」は、卒業すると同時に結婚を予定している者1名を除くと、未定、迷っているという記述があ

表8 学校卒業直後の進路予定 ()内%

学校	計	看護婦 になる	進学する	その他 無回答
A	30 (100.0)	12 (40.0)	16 (53.3)	2 (6.7)
B	38 (100.0)	25 (65.8)	12 (31.6)	1 (2.6)
C	32 (100.0)	26 (81.3)	4 (12.5)	2 (6.3)
D	109 (100.0)	83 (76.1)	17 (15.6)	9 (8.3)
E	61 (100.0)	41 (67.2)	9 (14.8)	11 (18.0)
F	38 (100.0)	18 (47.4)	16 (42.1)	4 (10.5)
G	43 (100.0)	19 (44.2)	18 (41.9)	6 (14.0)
H	39 (100.0)	20 (51.3)	10 (25.6)	9 (23.1)
I	42 (100.0)	34 (81.0)	6 (14.3)	2 (4.8)
J	17 (100.0)	4 (23.5)	1 (5.9)	12 (70.6)
計	449 (100.0)	282 (62.8)	109 (24.3)	58 (12.9)

進路選択状況調査報告（Ⅲ）

る者と無記入の者である。

これをみると、全体の62.8%を占める学生が学校卒業後、看護婦になる予定をもち、24.3%を占める学生は、保健婦学校・助産婦学校などへの進学を志望している。また、3年生の秋の段階で、未定という者も、少なからずみられる。もっとも、無記入の者は、整理する都合で、「その他・未定」と同じところにまとめているが、他の質問に対する回答の様子から推測すると、未定ではなさそうなケースもみられた。また、記述のある者であっても、「国公立の病院で働きたい」「東京の病院に就職したい」など、前にあげた例に比べると漠然とした方向のみを記述している例もみられた。

これら学校卒業直後の進路予定について、学校ごとにもとめてみると、学校の間で、大きなちがいがみられることがわかる(表8参照)。Jは、4年制の看護教員養成課程であるので、他の学校とその様相を異にしていることは十分予想されたが、B、C、D、E、Iのように、6割から8割位の学生が、卒業後は、看護婦になる予定をたてている学校もあれば、A、F、Gのように、半数近い学生が、主として保健婦学校や助産婦学校への進学を予定している学校もみられる。

② 進路決定の時期

卒業後の進路への記述がいかなるものであれ、いつ頃そういった方向を決めたのかを尋ねてみた。○年生の○月頃というように、細かく記入しても

らったが、結果は、表9、10に示すように、大きく6つの時期に分類して整理した。

これをみると、比較的多くの学生が、看護学校入学前後の早い時期に学校卒業後の進路を予定していることがわかる。しかし、全体の6割位の学生は、3年生になってから、卒業後の予定を具体化している。予定した進路が、看護婦として就職することなのか、それとも進学することなのかという点で、決定の時期をみてみると、次のようなことがわかる。すなわち、進学予定者は、看護婦就職予定者に比べて、早い時期から進路予定を具体化している者が多い。詳しく言えば、進学予定者のうち10人に3人は、看護学校入学以前かあるいは1年生の夏休み頃までに、進学の志望を決めている。そして約半数は3年生になる以前に、志望を明確にしている。これに対し、看護婦として就職する予定の学生の場合、その7割以上の者は、3年生になってから進路を明らかにしている。

進路決定の時期を、学校別に整理したのが表10である。学校により決定時期にさまざまな違いがみられるが、Eにおいて、早期に決定する者が少ない点、Iにおいて、早期に決定する者が非常に多い点が特に目立っている。特にIにおいては、実に8割近い学生が、3年生になる以前に、卒業後の進路予定を立てているわけで、この点に関して特色をもっていることを示している。

さらに学校ごとにもとめて、進学予定者の方が看

表9 学校卒業直後の進路決定の時期・進路別 ()内%

予 定 進 路	計	1年生の 8月以前	1年生の 9月～翌年 3月	2年生の 4月～8月	2年生の 9月～翌年 3月	3年生の 4月～8月	3年生の 調査 9月～時点 (10月)	無 回 答 非該当など
看護婦になる	282 (100.0)	31(11.0)	8(2.8)	14(5.0)	18(6.4)	105(37.2)	75(26.6)	31(11.0)
進 学 する	109 (100.0)	31(28.4)	0(—)	9(8.3)	9(8.3)	31(28.4)	16(14.7)	13(12.0)
計	391 (100.0)	62(15.9)	2(2.0)	23(5.9)	27(6.9)	136(34.8)	91(23.3)	45(11.2)

表10 学校卒業直後の進路決定の時期・学校別

学校	計	1年生の 8月以前	1年生の 9月～翌年 3月	2年生の 4月～8月	2年生の 9月～翌年 3月	3年生の 4月～8月	3年生の 調査 9月～時点 (10月)	無回答 非該当など
A	28(100.0)	4 (14.3)	2 (7.1)	1 (3.6)	— (—)	11 (39.3)	8 (28.6)	2 (7.1)
B	37(100.0)	5 (13.5)	1 (2.7)	2 (5.4)	2 (5.4)	12 (32.4)	6 (16.2)	9 (24.3)
C	30(100.0)	3 (10.0)	— (—)	2 (6.7)	2 (6.7)	13 (43.3)	8 (26.7)	2 (6.7)
D	100(100.0)	13 (13.0)	2 (2.0)	7 (7.0)	9 (9.0)	42 (42.0)	20 (20.0)	7 (7.0)
E	50(100.0)	3 (6.0)	— (—)	2 (4.0)	— (—)	18 (36.0)	22 (44.0)	5 (10.0)
F	34(100.0)	8 (23.5)	— (—)	2 (5.9)	3 (8.8)	15 (44.1)	6 (17.6)	— (—)
G	37(100.0)	6 (16.2)	1 (2.7)	1 (2.7)	5 (13.5)	8 (21.6)	8 (21.6)	8 (21.6)
H	30(100.0)	4 (13.3)	— (—)	4 (13.3)	1 (3.3)	8 (26.6)	7 (23.3)	6 (20.0)
I	40(100.0)	16 (40.0)	2 (5.0)	2 (5.0)	5 (12.5)	5 (12.5)	5 (12.5)	5 (12.5)
J	5(100.0)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	4 (80.0)	1 (20.0)	— (—)
計	391(100.0)	62 (15.9)	8 (2.0)	23 (5.9)	27 (6.9)	136 (34.8)	91 (23.3)	44 (11.2)

看護就職予定者より決定時期が早かった。特にB, D, Fでは進学予定者のうち4割前後は早期に決定していた。例外的にHとIの2校では、看護婦として就職する予定の者の方が、進学者に比べて多くの早期決定者を含んでいた。とくにIにおいては、就職予定者の4割は早期決定者であった。またHでは、進学予定者のうち、3年生になってから決定した者の割合が6割を占め、むしろHにおける進学予定者の決定の時期がとくに遅いといえそうである。

③ 重視したい条件

看護学生達が、卒業直後の進路を決める上で重視したいと考えている条件を自由に記述してもらった。その内容は、進路をどのようなものに決めているかということによって表現に違いがみられた。そこで看護婦になろうと考えている群と進学を予定している群とその他・未定群にわけて結果の整理をおこなった。各群で記述された中で特徴のあるものを列挙すれば次のとおりである。

看護婦になる予定の群の記述を概観すると大きくいえば2通りの立場、すなわち、個人の内的な

条件について記述する立場と進路先の条件について記述する立場とがみられた。数の上からみれば、後者が圧倒的に多い。

個人の内的な条件についての記述でまず多いのは、個々の学生がもっている希望・看護観・やりがいという点をのべたものである。具体的には、「自分のやりたいと思っていることができる」「自分の理想と一致するところ」「やりがいはあるか」などである。次に多くみられたのは、個性のさまざまな点について書かれたものである。具体的には、「性格にあう」「自分に最も適している職場」「自分の能力」などである。さらには、各人がもっている将来設計との関連について記述されたものも多くみられた。例えば、「自分の将来設計にあわせられること」「将来やりたいことはなにか」「続行できること」などである。「結婚」「恋人の意見」などもこれに含まれる。また、「義務なので条件なし」というような消極的な記述も少数みられた。

次に進路先の条件についての記述をみてみると、最も多く書かれているのは、卒後教育に関連する

ものであった。具体的には、「新卒者の教育が整っているところ」「技術面・知識面での向上が期待できる場」「勉強の続けられる環境」などである。次に多いのは、進路先の地理的な条件についての記述である。これは、さらに親の居住地と関係のあるものとならないものに分けられる。次に多く書かれているものを列挙してゆけば、看護体制、業務内容、職場の環境、勤め先の規模、施設、職場の人間関係、労働条件、賃金・収入などである。これらを大きく労働条件とまとめるとその記述された数は多くなり、全体の記述の半数に近いものとなる。

次に進学を予定している群の記述をみてみよう。多く書かれていることを順にあげていくと、通学の便など地理的条件について書かれたものがまず一群存在する。「両親の元から通学できる」「親元に近い」「都内であること」などである。次に将来に関するものがある。「将来の職業」「将来の就職に有利」「就職先の状況」などである。またそれと関連あるものとして、免許・資格についてふれたものもみられる。例えば、「必要な資格取得」「教育水準の高い養護教諭1級のとれる学校」などである。さらに、個性についての記述も比較的多くみられた。とくに、「適性」とか「自信・能力」という表現が目立つ。その他に比較的多くみられたのは、「講義内容」という記述である。

その他・未定群にとってこの設問は、これから意志決定する上での条件となるわけであるが、3分の1位の者は無記入であり、他の2群とは対照的である。この時期に卒業後の予定が立っていない学生のかかえている問題の一端を見る思いがする。記述されたものの中で比較的多くみられたのは、地理的条件に関するものと、将来性、労働条

件に関するものであった。

2) 職業経歴についての計画

看護学生達は、長期的にはどのような進路設計を立てているのだろうか。「あなたは、一生をとおして、どのような職業経歴を考えていますか。例にならって具体的に書いて下さい」という質問と共に、「看護婦として、数年働き、結婚を機にやめるつもり」などの例を示し、自由に記述してもらった。

その記述されたものについていくつかの例を示すと、

- 看護婦として数年働き、結婚後も可能な形で続けたい
- 養護教諭か保健婦として働きたいが、初め数年は看護婦として大病院で働きたい
- 保健婦・養護教諭の資格をとり、その後臨床にでたい
- 看護婦として数年働き、結婚したら養護教諭として働きたい
- 看護婦として、この病院で働き、その後他の病院ですっと働きたい
- 看護婦として一生働き、子供が0～6歳のときは休業
- 看護婦として2、3年働き、4年制大学に入り、また看護婦か望む職につき海外にもいきたい

など、バラエティに富んでいる。これら自由記述された内容を、最終的な職業、あるいは、最も長期間就業すると考えられている職業に注目して整理したのが、表11である。

この結果をみると、「看護婦」が59.2%と過半数を占め、次が「保健婦」17.8%、「養護教諭」5.3%、「助産婦」4.7%の順になっている。

学校ごとに結果をみてみると、Jを除く全ての

表11 長期的な進路予定

学校	計	看護婦	保健婦	助産婦	養護教員	看護教員	その他	無回答 わからない
A	38(100.0)	13 (43.3)	7 (23.3)	1 (3.3)	6 (20.0)	— (—)	— (—)	3 (10.3)
B	38(100.0)	24 (63.2)	4 (10.5)	5 (13.2)	3 (7.9)	— (—)	— (—)	2 (5.3)
C	32(100.0)	22 (68.8)	6 (18.8)	4 (12.5)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
D	109(100.0)	75 (68.8)	18 (16.5)	2 (1.8)	1 (0.9)	1 (0.9)	— (—)	12 (11.0)
E	61(100.0)	43 (70.5)	10 (16.4)	2 (3.3)	2 (3.3)	1 (1.6)	2 (3.3)	1 (1.6)
F	38(100.0)	20 (52.6)	9 (23.7)	4 (10.5)	2 (5.3)	2 (5.3)	1 (2.6)	— (—)
G	43(100.0)	25 (58.1)	9 (20.9)	1 (2.3)	5 (11.6)	— (—)	1 (2.3)	2 (4.7)
H	39(100.0)	21 (53.8)	9 (23.1)	1 (2.6)	2 (5.1)	— (—)	5 (12.8)	1 (2.6)
I	42(100.0)	22 (52.4)	7 (16.7)	1 (2.4)	1 (2.4)	— (—)	5 (11.9)	6 (14.3)
J	17(100.0)	1 (5.9)	1 (5.9)	— (—)	2 (11.8)	5 (29.4)	6 (5.9)	7 (41.2)
計	449(100.0)	266 (59.2)	80 (17.8)	21 (4.7)	24 (5.3)	9 (2.0)	15 (3.3)	34 (7.6)

学校で、「看護婦」が最も多くの割合を示しているが、2番目に多い職業については、Bのみが「保健婦」でなく、「助産婦」となっている。3番目に多い職業については、学校間に違いがみられ、「助産婦」と「養護教諭」のうちいずれかが、示されている。

記述のしかたに統一がはかられていないので完全に比較することはむずかしいが、次に各職業ごとに考えられている経歴の特色をまとめてみたい。

まず最も数の多い看護婦志望者であるが、約半数は、ファミリー・ライフサイクルのうち結婚・出産・育児という点にかかわりなく、なんらかの障害が生じない限り、一生続けるという経歴を予定している。次に多いのは、出産および育児による中断期を持ちながらも、子供が成長したら、再び職を求めようと考えているグループである。この育児期中断型ともいうべき経歴を予定している学生は、ほぼ4人に1人位の割合を占める。さらに、結婚を境にして職業経歴に変化を予想する一群の学生がいる。これは5人に1人位の割合であり、このグループのうち3分の2の学生は、結婚と同時に少なくとも看護婦という職業からは引退しようとして予定している。残りの3分の1は、結婚生活を重視したいので、相手次第だというような

ことを述べている。

予想している職業経歴という点で、看護婦志望者と他職種志望者との違いをみると、看護婦志望者には、一生継続型が相対的に低いこと、結婚引退型が相対的に多いことなどをあげることができる。

長期的には「保健婦」、「助産婦」、「養護教諭」という職業を志望している学生の職業経歴の予定を同じようにまとめてみると次のようであった。看護婦志望者と比較してみると、この3職種を志望する学生は、その8割から9割が一生継続的な職業経歴、すなわち、資格をとるまでいろいろな出来事が予想されても、職業生活は持続してゆくという経歴予定をたてていた。それゆえ、看護婦志望者にみられた結婚引退型や育児期中断型はたかだか2割程度である。また、上記3職種を志望する者には卒業後直ちに進学を考えている者、数年後に進学を考えている者のちがいはあっても、少なくとも数年間は看護婦としての実務経験を持つと計画している者がかなり多く含まれている。その割合が高いのは、助産婦志望者、保健婦志望者、養護教諭志望者の順であった。

長期的な進路設計において看護婦としてのキャ

表12 看護婦就職予定者の希望する職場の条件

	実習病院	両親の居住地に近い	首都圏にある
重視する	196 (73.7)	96 (36.1)	127(47.7)
重視しない	66 (24.8)	162 (60.9)	130(48.9)
無回答	4 (1.5)	8 (3.0)	9(3.4)
計	266 (100.0)	266 (100.0)	266(100.0)

リアを予定している学生は全体で266人いたが、この学生達に対して、就職の際考えている職場について、「実習病院」が就職先として考えられているかどうか、「就職先が両親の居住地に近いこと」や、「首都圏にあること」が重要な条件になっているかどうかを尋ねた。

結果は表12のとおりである。

まず「実習病院」を勤め先候補にしているかどうかについてみると、ほぼ4人のうち3人の学生が実習病院に勤めることを考慮していることがわかる。この割合を、学校卒業後の進路別にみても、看護婦になる予定の者と進学予定の者との間に大きなちがいはみられない。しかしながら、学校別にみても、大きな違いがあった。すなわち、学校B, C, F, G, Iではほぼ9割から9割5分もの学生が実習病院を勤め先として考えているのに対し、D, E, A, Hではその割合が低い。

次に両親の居住地と勤め先との関連では、ほぼ3人に1人位の割合で、「勤め先が両親の居住地に近いこと」を重視していることがわかる。この割合を、卒業直後の進路予定別にみても、「進学予定者」で21.4%、「看護婦予定者」で36.0%、「その他・無回答者」で、45.8%と順に割合が高くなっている。直後の予定がたっていない者の割合が最も高いのは最近の大学生の親元就職志向という一般的風潮と共通する点が見られるのかもしれない。

また、この就職における親元志向を学校別にみると学校によるちがいが顕著にみられた。すなわち、学校H, E, Aなどでは親元志向者が4割以上を占めているのに対し、I, F, Cなどでは2割台であった。

「就職先が首都圏にある」という条件がいかに重視されているのかをみると、全体で47.7%が勤め先を首都圏に求めていることがわかる。調査対象者の高校の出身地の分布では、東京都および関東地域で3割程度であることを考えると、就職に関して大都市志向がみられるといえよう。卒業直後の進路別にこの割合をみると、看護婦として就職する予定の者と進学予定者との間に大きなちがいはみられないが、当面の進路が未定の者ではこの割合が66.7%と高い値を示しているのが目立った。また、学校別にこの割合をみても、親元就職志向以上に学校による違いがみられた。すなわち、学校A, D, E, Cのように首都圏を志向する者の割合が5割から7割と高い値を示す学校とG, Iのように1割から2割と低い値を示す学校とがみられた。

3 看護教育に対する態度・意見

調査対象者達は、入学してから約2年半の間にさまざまな職業教育を受けてきた。その中で自分達の受けている看護教育に対してどんな感想や意見を持つのであろうか。ここでは、①看護教育に対する不満 ②看護教育の中で不足しているものの2点から看護学生の看護教育に対する態度や意見をみてみた。

1) 看護教育に対する不満

第1回の調査の際に当時の3年生に対して次のような看護教育に対する満足度に関する質問をした。すなわち「あなたは現在行なわれている看護

表13 看護教育に対する不満・学校別

単位：%

学 校	1)一般教養	2)専門教育	3)看護実習	4)教 師・ 指 導 者	5)生活指導	6)進路指導	7)施設・ 設 置	8)その他
A (30)	73.3	70.0	50.0	63.3	46.7	30.0	40.0	3.3
B (38)	63.2	50.0	36.8	44.7	5.3	28.9	21.1	2.6
C (32)	59.4	59.4	87.5	75.0	56.3	56.3	56.3	9.4
D (109)	34.9	22.0	38.5	45.9	10.1	22.9	21.1	2.8
E (61)	50.8	34.4	65.5	57.4	8.2	34.4	27.9	4.9
F (38)	60.5	71.1	47.4	65.8	21.1	23.7	47.4	5.3
G (43)	69.8	60.5	48.8	55.8	20.9	30.2	48.8	4.7
H (39)	28.2	25.6	30.8	56.4	5.1	35.9	48.7	2.6
I (42)	66.7	52.4	54.8	61.9	66.7	26.0	21.4	11.9
J (17)	23.5	52.9	29.4	23.5	5.9	11.8	23.5	5.9
計 (449)	51.2	44.1	48.6	54.8	21.8	29.6	33.2	4.9

教育にどの位満足していますか。次の各点について『満足している』から『満足していない』の5段階で答えて下さい」という質問の下に、1)一般教養 2)専門科目 3)臨床実習 4)臨床実習の方法 5)臨床実習の実習場 6)臨床実習の指導者 7)臨床実習の評価 8)課外活動 9)寮生活 10)学生生活の自由さ 11)学校の教師 の11項目について5段階で評定することを求めた。その結果は、9)寮生活および、5)臨床実習の実習場という2項目を除く9項目においては、「不満足」の割合が「満足」の割合より高かった。特に、1)一般教養 2)専門科目 に対しては、「不満」とするものが6割を超えていた。

このような第1回調査の結果を参考にして、第2回調査では「不満」の中味をより詳しく検討するために次のような設問により、自由記述法により回答を求めた。すなわち、「看護教育について不満な点があったら、次の各項目に添って書いて下さい」という質問の下に、1)一般教養に関連して 2)専門教育に関連して 3)看護実習に関連して 4)教師・指導者に関連して 5)生活指導に関連して 6)進路指導に関連して 7)施設や設置に関連して 8)その他 の8項目について「不満と

する内容」について記述することを求めた。

結果についてみると、調査時間が限られたものであったにも拘らず、多くの学生は各項目に対して具体的に不満な点を記述している。これは、彼女らの不満の強さを示しているといえよう。表13は、各項目毎に記述のある者の割合を学校別に示したものである。この表からは、まず大きくみると看護学生は看護教育のどのような側面に不満をもっているかがわかる。表においては50.0%を超える項目については太字で示してあるが、これを目安として各項目をみてみると、4)教師・指導者に関する不満が最も高く、全体の54.8%の学生は、具体的な不満を記述している。次いで多いのが、1)一般教養 に関するもので51.2%を占めている。さらに、3)看護実習 や2)専門教育 に関する不満を表明する学生も全体の4割以上いる。これら4項目に比較すると、5)生活指導 6)進路指導 7)施設・設置 などに対して不満を記述する者の割合は低い。また、7項目以外について不満を記述する者は約5%と数少ないこともわかる。

これらの傾向を学校別にみてみると次のようなことがわかる。第1に、1)一般教養 から4)教師・指導者 までの4項目では、どの学校でも不

進路選択状況調査報告（Ⅲ）

満を表明する者の割合が高い。このことは、これらの項目が各学校の教育方針等の違いがあっても、広く学生が不満をもちやすい項目であることを予想させるものである。第2に、5)生活指導 から7)施設・設置 までの3項目についてみれば、前の4項目ほど不満とする者の割合は高くない。第3に、4)教師・指導者 についての不満は、どの学校でも高いのに対し、第4に、5)生活指導 は、他の項目に比べ、不満度が高いわけではないが、学校による違いが極端にみられる。

学校ごとに細かくたちいってみると、Cのようにどの項目に対しても不満度の高い学校、E、Fのように、全体的な不満度は中位であるが項目間で不満のあり方に違いがみられる学校、D、Jのように、どの項目に対しても不満度の低い学校などがみられる。

次に、具体的にはどのような不満を持っているのか、各項目ごとに不満の内容が問題となる。ここでは、広くいろいろな学校で記述の多かった1)一般教養 から4)教師・指導者 までの4項目について少し詳しく自由記述の内容をとりあげ、整理してその傾向をみてみたいと思う。

① 一般教養に関連して

一般教養に関して記述された内容を概観してみると、「内容が充実していない」という点と「時間数が不足している」という点にふれたものが大勢を占めている。さらに、「科目選択の自由度が小さい」という指摘、あるいは、看護婦としてのキャリアを予定しているグループに目立つのは、「看護とのかかわり合いがわからない」というものであった。いくつか典型的な記述を列举してみよう。

○内容を狭くして密度の深いものとしてほしい

- もっと充実した講義を
- もっと幅広く学びたい
- 時間にゆとりがなく、課目が少ない
- 時間が足りない
- 選択できるようにしてほしい
- 選択制にして、時間をふやすべき
- 看護・人生にもっと役立つもの
- 必要性がわからない
- 何のためにやっているのか理解しがたかった

また、そうした現状に対し、

- 哲学・宗教が必要
- 語学を重視すべきである
- 3年に音楽はいらないので、体育を入れてほしい

などのように、具体的な形で指摘する者も少数みられた。一方、不満が多い現状に対して、一般教養の時間そのものに疑問を示すような記述も少数ではあるがみられた。

- どうせみんな集中できないのだから適当でよい
- 何かと忙しくて、やらなくてもいいと思う
- おしきせで、型どおり適当にやればよい感じ

さらに、充実していない理由の一端を、講師の在り方に言及したものもいくつかみられた。

書かれた背景について推量してみると、全般的には、一般教養の時間があることそのものに疑問を述べた例は少数派で、大部分の学生は、自分の興味や関心と結びつけながら、幅広くかつ深みのある教養の形成を志向しているのであるが、時間不

足や選択の余地の少なさのためにそれが実現できていない現状に不満を表明しているように見える。

② 専門教育に関連して

専門教育に関連して学生達が抱えている不満を概観すると、大きくは数点にまとめられ、一般教養に関連する不満よりもバラエティはみられなかった。すなわち表現の微妙なちがいはみられても、不満は次にあげるような4つの点に集中していた。第1につめこみ主義であるという点、第2に専門教育内部の系統性・関連性という点、第3に専門教育の中味の充実という点、第4に、講師にかかわる点、である。記述された数からみると第1のつめこみ主義であるという点に関するものが圧倒的に多い。次に具体的な例を紹介してみよう。

第1のつめこみ主義であるという点についての典型的なものは、そのものズバリの

- つめこむだけつめこんでいると思う

という表現もあるが、その裏かえし式なものと考えられる、

- 時間にゆとりなし。みんなで話合う時間もほしい
- 深くゆったり学びたい

という表現も多い。また、この問題点を自分の専門性の獲得という角度からみて、

- 必要で重要なことはきちんと教えてほしい
- 理解できないうちに、次に移ってしまう
- 短時間では消化しにくい

などの将来の不安とつながりそうな表現もみら

れた。

第2の専門教育内部の系統性、関連性という点では、

- 科目ごとの関連性がなく、断片的にしか捉えられない
- 系統的にやった方がよい。でも3年間では無理かも
- 実習と同時に進行できるようにしてほしい
- 臨床に役立つ指導をしてほしい
- 実習をしながら講義するのが理想。解剖は実物を目の前に

など、各教科間で重複をなくし関連性や系統性を増やすこと、そして臨床実習とのタイミングのよい関連づけを望む声が表明されている。

第3に専門教育の中味の充実ということに関連しては、

- 教科書どおりすぎる。もっと幅広く
- もっと人間的なものを学びたい
- ICC, CCUなど特殊な看護も学びたい
- 自分の力をつけたいところをゼミで専門の先生について勉強したい
- 今問題となっている疾病をおりこんでほしい

など、あふれるばかりの専門教育への期待や熱意が充たされないことにふれたものが多い。

第4の講師に関するものは、

- 考える能力のない臨床看護婦が教えている
- わかりにくい授業、講師にやる気のない授業
- ただ時間つぶしというだけの講師がいる

進路選択状況調査報告(Ⅲ)

など、数としてはそれほど多いものとはいえないが、いずれもシニカルな表現をとっている。

その他にもこれらとはニュアンスの異なる記述もいくつかみられたが、それらは全て、専門教育の一層の充実を期待するものであり一般教養に関する不満に示されたような、その存在に対する根本的な疑問を示すものは全くなかった。

③ 看護実習に関連して

看護実習に関連して書かれた不満は大きくは、第1に、実習活動そのものの日程、カリキュラムなどのしんどさ、短かさに対するもの、第2に、実習の一層の充実を望むもの、第3に、実習場での学生の受け入れ体制に関するものなどに集中している。しかし、細かくみてみると、第3の受け入れ体制に関する不満は、特に学校C、D、Eの学生に表明する割合が高いなどの偏りがみられるのに対し、他の2項に関するものには学校差が目立たない。また、記述数の点からいうと、第1の、実習活動そのものの日程・カリキュラムなどのしんどさ、短かさに対するものが最も多く、次いで、第2、第3の項に関する不満という順であった。具体的な記述をみてみよう。

第1の、実習活動そのものの日程・カリキュラムなどのしんどさ、短かさに対して書かれたものは、

- 実習はつらい
- 記録物を書くための時間がほしい
- 身体的負担がもう少し軽くなるといい
- 時間的余裕がほしい

など、きつさ、しんどさなどに触れた表現と、

- 時間が短い。色々なところでやってみたか

った

- 期間を長くして自分に自信をつけたい
- 期間が短かすぎて、卒後に不安が残る
- 短い。せっかく慣れたところでやめになる

など、期間の短かさに触れた表現にわかれる。第2に、実習の一層の充実を望むものに関する記述をさらに細かくみると、実習の内容に関するもの、臨床指導者に関するもの、指導方針に関するものなど分けることもできるが、それぞれの典型的なものをあげるとすれば、次のようなものになる。

- 実習のカリキュラムがわるい
- 平均して病気がみられない
- もっと実習内容を豊かにしてほしい
- 実践の指導を重視してほしい
- 人によって指導方針が違う
- 専任の教育者が個人の能力に合わせて行なってほしい
- 臨床指導者を増やしてほしい
- 先生により指導態度が異なり、意欲をそがれたりする

- 一貫した指導の下に実習を行ないたい
- 指導体制が確立されてない
- 実習場所に生徒の希望入れて
- 講義と実習を併行させてほしい
- 学生の個性を生かす指導をしてほしい

第3に、実習生の受け入れ体制に関する記述は、先に述べたように学校による偏りがみられるが、具体的には、

- 受け入れ体制がよくない
- スタッフの協力がえられない
- スタッフと教務の言うこと、することは同じであってほしい
- 実習場と教務の連絡・話し合い不足のため、ふりまわされる

などである。また学校Dについては、「実習場が遠い」という不満がみられた。また、以上の他には、少数派として、

- 医師、スタッフに気がねして思いきりできない
- (看護の現場は)人間性に欠ける
- (臨床での)やり方が様々なので(学校の)先生に補ってほしい

などの記述もみられた。

④ 教師・指導者に関連して

教師・指導者に関連して表明された不満は大別すると、第1に、教師・指導者の数について表明されるもの、第2に、コミュニケーションの不足について表明されるもの、第3に教え方について表明されるもの、第4に、教師・指導者の個性について表明されるもの、第5に学生に対する態度について表明されるもの、第6に指導体制について表明されるもの、などに分けることができそうである。しかしながら、表現にはそれぞれ微妙なニュアンスの違いが感じられ、教師・指導者に関連して学生たちが抱く不満というものが、学生自身の個性とのかかわりの中から表明されるという側面をみる思いがする。記述された数という点からみると、第2、第3、および第5の点についてふれたものが多い。順に典型的と思われる記述例

をあげてみよう。

第1の教師・指導者の数について表明されるものは、

- 専任教員が少ない
- 人数が多い方がよいと思う
- 熟練者が少なく、移動が激しい

などであるが、特に、学校A、Bについては、

- 専門臨床指導者をもっと多くしてもらいたい
- という点にふれた者が多くみられた。

第2に、コミュニケーションの不足に関しては、

- 顔を合わせる機会が少ないので相談する気になれない
- 人間的なつながりがない
- 接する機会があまりなく、こわくて近よれない
- もっと身近な感じで接することができる雰囲気してほしい
- 技術を教えるだけ
- 学習以外にも気軽に話をしてみたい

など、教師・指導者との幅広い人間的な交流ができないことに対する不満を述べたものであり、第5の、学生に対する態度ということとも関連をもっているようである。

第3の教え方に関するものは、

- 要所をとらえた授業を
- 教えることのできない教師、意見をおしつける教師が多い

進路選択状況調査報告（Ⅲ）

- もっと実践面をとりあげてほしい
- できるだけ新しい情報を望む
- もっと熱心に個別指導をしてほしい
- 実習にどんどん参加してほしい
- もっとていねいに教えて

などである。

第4の教師・指導者の個性に関するものは

- 個性がありすぎる
- 教育理念が違いすぎる。個人的感情を表わす人がいる
- あたたかみがない
- 教師が感情的
- 物の言い方にトゲがある
- 言うことを素直にきいてくれず、自分の考えをおしつけようとする
- もっと信頼できる視野の広い人であってほしい

など、かなり辛辣な意見が表明されている。

第5に、学生に対する態度にかかわっては、

- 学生が人格をもつ人間に育ちはじめていることを忘れている
- 学生全体を大らかに見てほしい
- 学生に対して先入観が多すぎる
- 生徒を差別してほしくない
- 教師はできない者にほど目をかけるべき
- かたにはまった考えをおしつける。学生に対する偏見が強い
- 固定観念で個人を評価、柔軟性がない
- 実際に私たちの行動をみてアドバイスしてほしい

- 生徒の自主性を重要視してほしい

など、教師や指導者の学生観あるいは学生理解のあり方に対する不満がさまざまな表現で記述されている。

第6に、指導体制に関するものは、

- 実習場での指導がまちまち
- 先生により意見が違うので一致させて
- 個々の学生に対する指導が不十分
- 良い人と悪い人では差がありすぎて一言ではいえない
- それぞれの間の連絡がとれてないので混乱する
- 方針が一貫していず、個人的な部分多い

などの記述が多くみられた。

2) 看護教育の中で不足しているもの

調査時点は、第3年時の秋であるので、約2年半の看護教育を受ける中で学生たちが感じたり考えたりした看護教育に対する思いを「現在の看護教育の中で、特に不足していると思っていることを書いて下さい」という質問の下に自由記述法で回答を求めた。

結果は、全体のうちの120人、ほぼ4分の1の人は無記入、あるいは、「わからない」というものであったが、残りの全体の4分の3にあたる人からはさまざまな表現をとる記述が得られ、学生たちが、現行の看護教育に対して抱いている批判的な態度を知る思いがする。

記述された文章の類似度から批判点を分類整理してみると10こぐらいのカテゴリーに分けることができそうである。属する学生数の多い順に列挙

してみると、①一般教養に関するもの ②時間、ゆとりという点に関するもの ③看護技術に関するもの ④人間関係についての技術に関するもの ⑤自主性、自由に関するもの ⑥教師・指導者に関するもの ⑦看護学ということに関するもの ⑧教師と学生との交流に関するもの ⑨地域看護に関するもの ⑩その他 になる。これらのカテゴリーの中で、特に、①は全体の18.3%、②は16.9%、③は14.9%をそれぞれ占めていて、学生達の看護教育に対する批判、見方をかえれば要重点が、人格の形成と専門技術の習得へ向けられていることを示しているように見える。なお10このカテゴリーは、暫定的なものであり、例えば①、②、⑤には共通した要素がみられるし、同じように、③、④、⑦にも同様な傾向がみられ、もっと大きなくくり方も可能であろう。

次に、もう少し具体的な記述例をとりあげながら、学生たちが表明しているものを詳しくみてみよう。

まず、一般教養に関するものは、単に、

- 一般教養

という記述が多いが、それらは、

- 人間に対する思いやり、やさしい心の大切さ
- 学生の人格形成
- 豊かな人間性を培うという点

さらに、

- 看護に集中せず、1人の人間として成長できるような教育
- 情緒を養うこと

という表現にみられるように、一般教養とは単にいろいろ幅広い知識をもつという意味ではなく、学生1人ひとりの人間性を高め、人間的な成長を促すという点であることを示している。

第2に、時間、ゆとりという点に関するものであるが、この典型的な例は、

- 時間的余裕
- ゆったりしたカリキュラム
- ゆとり、幅広い勉強ができる時間
- 自分自身でいろいろなことを考える時間

などである。これらは「不足しているものは？」という質問に対し、即物的に時間の短かさとそれにとまなうゆとりのなさを記述したものとみられるが、もし仮に、もう少し時間があるならば、何を求めるのかということになると、先にあげた一般教養、あるいは、次にとりあげる専門的な技術、知識の習得というような内容になるのかもしれない。

さて、第3に、看護技術に関するものであるが、この中には、表現の微妙なニュアンスの違いで分けるとさらに3つのタイプがみられた。第1は、

- 基礎的な技術
- 現状の把握と対応の仕方

という記述例に示されるような基礎的・基本的な技術や知識に対する教育について触れた一群である。第2には、

- 実習と密着した教育
- 実践と知識を結びつける実習
- 実践に即した技術・教育

進路選択状況調査報告（Ⅲ）

という例にみられるように、専門教育が系統性・関連性をもつことに触れた一群がみられる。

第3には、

- 技術の習得・実習において学校で習ったことをさらに展開することが、各個人の能力に合わせて行なわれていない
- 技術の指導・応用能力を養うこと
- 応用のきく看護教育

など、応用力の養成にふれたものがみられた。しかしながら、いずれの場合もこれらの不足感の背景には、将来一人前の看護婦（あるいは保健婦・助産婦など）として看護実践を行なっていく上で、習得した技術や知識が十分なものではないかもしれないという不安感があるような気がする。

第4の人間関係についての技術に関する記述は、看護学の中の特に人間関係についての技術にふれたものであり、分類上はあるいは、先の看護技術に関するものの中にも含めてもよいものである。このカテゴリーに関しても、詳しくみると、どのような対象との人間関係を問題にしているのかという点で2つに分けることができる。まず、

- 患者に対する接し方
- コミュニケーションの技術
- 人間関係、社会性についての指導

など、看護活動の対象である患者との人間関係を問題にしている記述で、こちらの方が数の上でも圧倒的に多い。これに対してもう一群、

- 看護婦同士の人間関係

- チームワークを育てる

など、医療チームの一員としての人間関係を問題にしているものもみられた。

第5は、自主性・自由に関するものであり、さらに分ければ、個の確立あるいは個性に合った教育という点に触れたものと、自主的な学習活動や研究の機会という点に触れたものとがみられる。それぞれについての具体例は次のようなものである。

- 個人の自主性の芽をのばすこと
- 自己の考えの確立
- ひとりひとりの看護観を伸ばしていく自由さ
- 学生の自主性をひき出す努力
- 時間をかけた自主研究活動
- ゼミというような自分たちで話合ったりすること
- 学生が自由に研究活動をする時間

第6に、教師・指導者に関するものでは、

- 臨床指導者（が不足）
- 教務側のレベルアップ
- 看護学生の長所を引き出してくれる教師

などのように、人員の数の問題と質の問題の双方の指摘がみられる。

第7として、看護学ということに関するものは、具体的には、

- 看護学という専門的学問の確立が十分になされること

などであるが、単に、

- 一貫性（に欠ける）

という表現や

- 資料不足

というのも、関連するものとしてこのカテゴリーに含めてよかろう。

第8は、教師と学生との交流に関するものであり、第6のカテゴリーに含めてもよいが、特に、教師と学生との交流という点にふれた一群である。具体的には、

- 指導者—生徒間の理解ある交流
- 教師と生徒の親近感
- 教える者と学ぶ者との交流
- 指導者側との人間的接触

第9に、地域看護に関するものであるが、この点に触れたものは2人で、

- 地域における看護
- 地域看護との結びつき

というものである。

その他のものとしては、

- 設備と人材
- 選択科目
- 社会のながれをつかむこと
- 看護以外のいろいろな世界（サークル、先輩後輩のつながり etc）への興味と参加
- 実習病院

などがあった。

III ま と め

本調査では、看護学生の看護学校におけるキャリア発達のプロセスに注目してきた。その際われわれは看護学生を単に「看護婦の卵」としてとらえるだけではなく、個を形成しつつある青年としてとらえようとした。そこで、最後に調査全体のまとめにかえて、第1に聖職観を1つの鍵概念として、看護教育が、「看護婦の卵」たる看護学生が看護婦となってゆくこととどのような関連をもっているのかという点、そして、第2に看護学生が自由に記述した看護教育に対する不満などをてがかりとして、看護学生は看護教育に対してどの

ような役割を期待しているのかという点についていくつかの考察を加えてみたい。

1) 「看護婦＝聖職」観の変化と看護教育

「看護婦は、一般の仕事と違い尊い職業だ」という意見に賛成かどうかを問うた項目は、看護婦を聖職と考えるかどうかを質問している。専門職（profession）の特質は、その奉仕性と専門知識とにあると考えられるが、この奉仕性を備えた職業が聖職と呼ばれるものである。

1年時においては、「看護婦＝聖職」とするものが36%おり、これを否定するものは12%しかい

進路選択状況調査報告(Ⅲ)

表14 「看護婦=聖職」観の変化

()内%

1年時 \ 3年時	ほ ぼ 一 致	ど ち ら と も い え ない	一 致 し ない	計
ほ ぼ 一 致	59 (36.8)	85 (53.1)	16 (10.0)	160 (100.0)
ど ち ら と も い え ない	33 (14.3)	157 (68.0)	41 (17.7)	231 (100.0)
一 致 し ない	4 (7.3)	23 (41.8)	28 (50.9)	55 (100.0)
無 回 答	— (—)	3 (100.0)	— (—)	3 (100.0)
計	96 (21.4)	268 (59.7)	85 (18.9)	449 (100.0)

なかった。これ以外の人たちは、「どちらともいえない」と答えている。3年時の調査においては、約60%が「どちらともいえない」と答えており、あいまいな回答が多いという点では1年時の調査と同じ傾向を示している。

もう1つの特徴は、看護婦を聖職だとする者が減少し、そうでないとする者が増加していることである。もちろん、個々にみれば、1年から3年の間に、聖職と考えていなかった者が聖職と考えるようになるケースも少なからずあるのだが、聖職と考えていた者が、そうでなくなるケースのほうがずっと多いという点である。その変化のようすは、表14に示されている。

この変化は何を意味しているのであろうか。一般に看護婦という職業イメージでは奉仕性が強調されている(白衣の天使)。それに対して、専門職としてのもう1つの重要な要素である、高度の専門的知識を必要とするという側面は充分には認識されているとはいいがたい。このような職業イメージを、看護学生も同様にもって入学してくると考えられる。彼女たちは看護学校での教育によって、看護婦になるためには、高度の専門知識が必要であることを知るのである。

「入学した当時とくらべて、現在のあなたの看護、看護婦に対する見方や考え方は、変わっていますか」という3年時の質問(自由回答)に対して、目立った回答は、看護婦が独自の専門的知識

を必要とすることを知った、というものであったことは、これを裏づけている(前回の報告参照)。看護学校は、プロフェッションの備えるべき要素のうちの知的側面を強調し、奉仕性については改めて教育しないとも考えられるし、それらをも取りあげるが、そのことは看護学生が既にもっている看護婦像に適合的なために変化として認識されないとも考えられる。いずれにしても、看護教育においては奉仕性を新たに強調されることがない。一方、看護婦という職業は彼女たちにとって、看護教育をうける中でより具体的、現実的なものとなり、また日常的な存在となる。その過程で、彼女たちは看護婦の職務がビジネスライクに行なわれていることが多いことなどを見聞する。これらの影響によって看護婦を聖職とする見方を否定する者が多くなるのであろう。

看護婦の労働条件改善の立場から、『看護婦=聖職』とする見方は奉仕性を強調する余り、看護婦を低賃金などの悪条件でもよいとする考え方に通ずる恐れがある」として、意識的に聖職観を拒否することも考えられるが、この調査からはこのような考え方の影響があるかどうかはわからない。

さて、看護婦を聖職であると考えている人たちは、他の質問項目に対する回答にどのような特徴を示しているのだろうか。

まず、出身地が大都市であるものより、小都市・農村部出身者に聖職意識をもつ者が多い。「身

近かに看護婦になった人がいたかどうか」とは特に関連がなかった。また、看護婦イメージの形成に関して、マス・コミの影響は全体としては小さかったが、聖職意識をもつものはこれらの影響を受けたものが比較的多かった。「仕事を生涯続けるか」、また「自分の子供に看護婦をすすめるか」については、1年時には聖職意識と有意な関連があったが、3年時の回答では特に関連がみられなかった。

看護婦の職業イメージは、看護学校入学以前(回顧データであるが)、1年時、3年時のいずれをとっても聖職意識をもっている者の方が肯定的なイメージをもっている。ただし1年時で「収入」について、3年時で「将来性」については有意な差はみられなかった。3年時で質問した「就職したい職場の条件」については、「職場の安定性」に関する評価に差異がみられるようである。

先にみたように、1年時と3年時とを比較すると聖職意識を変化させた者が多い。全体としては看護婦を聖職だと考えなくなる者が増えているが、聖職意識をもつ方向に変化した者も存在する。聖職意識をもつ方向へ変化した者と、もたなくなる方向へ変化した者との間にはどのような差異があるだろうか。これに対しては、現在までの分析でははっきりした解答はでていない。聖職意識を変化させた者は同時に、職業の社会的貢献を重視する程度、職業に能力発揮の機会を求める程度、看護婦の職業イメージとして「仕事の内容」「社会の評価」「専門性」「社会的貢献」「やりがい」の側面に関するイメージを変化させている。しかし、これらは、聖職意識と因果関係をもつというよりは、他の要因があって、それらが聖職意識も変化させ、同時にこれらの意識も変化させたと考えるほうが適切であろう。

2) 看護学生の看護教育に対する欲求について

Ⅱの結果においては特に自由記述された具体的な内容をまとめながら、看護学生たちが看護教育の中にあって、さまざまな場面でどのような思いを抱いているのかを概観してきた。これらを見ると、看護学生たちの不満は、一般教養、専門教育、看護実習、教師・指導者に対して特に集中する傾向がみられたし、看護教育における不足感に関していえば、人格の形成に関する側面と実践的な専門技術・知識の習得に関する側面が考えられている様子がうかがえた。これらは、先に考察した、プロフェッションのもつ奉仕性および高度な専門性とそれぞれ深い関連性をもっている事からのように思われる。

ところで、不満あるいは不足感は、そもそも各個人がそのおかれた環境の中で、環境と個人のもつ特性との相互作用の過程で具体的に生じてくるものであろう。それゆえ、これまで紹介してきた典型的な記述内容から直ちに、現行の看護教育のかかえている問題点はこれこれであるというような結論をだすことには問題があろう。しかしながら、それだからといって、ここに書かれたような不満や不足感を、単に「学生(修業)時代はみんなそんなものなのだ。幾多の先輩達もそんな体験の中から成長してきたのだから……」と解釈するだけでよいのであろうか。全体の半数位の学生達は、自由記述欄に無回答であったという点も十分配慮しなければならないけれど、ここでは学生達が共通に記述し表明している不満や不足感ということを手がかりに、1人の人間として成長しつつある個々の看護学生にとって看護教育の場がどんなものとしてとらえられているのかということを考えてみたいと思う。

学生達の看護教育に対する不満や不足感の背景

にある、学生達が看護教育に期待するもの、欲求というものを推測してみると次の4点にまとめられそうである。

まず第1は、1人の人間として幅広い豊かな教養を身につけたいという欲求である。この欲求は、教養を単なる物知りという風にとらえているわけではなく、次にのべる専門的な活動を豊かに行なう上でバックボーンとなるようなものとしてイメージされていることが、記述された不満の随所に感じられる。そして、この欲求を満足させる場として一般教養の時間を位置づけるからこそ、現行のカリキュラムのもつさまざまな貧弱さに耐えられないという感想をもつのであろう。不満としては、物理的な時間数の少なさを指摘する記述が多いのであるが、それは単に時間を確保すれば解決される問題ではないことは、教師・講師のやる気や科目の選択性の幅を広げることに触れた記述からも明らかである。

第2に、将来専門的な医療保健従事者として、より高度で最新の専門的な技術や知識を身につけたいという欲求である。この欲求は現行の看護教育の中ではほぼ実現されていると考えてよいようであるが、医学および看護学の変化の激しさを反映してか、消化すべき知識や身につけるべき技術的なものの絶対量が多すぎて、「つめこみ主義」になってしまっていることに対する不満は大きい。そうした過密なカリキュラムの中で、内容の重複がみられたり、単に言葉を覚えることに終始するようなことが続くとき、学生たちは、系統性のある、独自の専門領域としての「看護学」を夢見て、不満感をつのらせるようである。

さらに第3には、それら高度な専門的な技術や知識を実際の職業的活動、すなわち、臨床的な場面の中、あるいは十分その関連性を保たれた場面

の中で、身につけてゆきたいという欲求である。

第4には、それら専門的な技術や知識を、自分の個性に合わせて、自主的な活動を通じ、教師・指導者あるいは友人達との暖かく豊かな交流の中で修得したいという欲求である。

第3と第4の2つの欲求は、専門性を身につけるときのプロセスにかかわって生じるものであり、文字通り「身を持って」「主体性をもって」自己の専門的な能力を高めてゆきたいという欲求である。しかしながらこの欲求は、学生の個性の違いに合った教育を行なうにはあまりに過密な訓練スケジュールと、自主性を生かすという志向性が必ずしも強いとはいえない教師や指導者の前に、さまざまな不満を生み出しているようである。

これらの4つの欲求は、学生の立場に立つなら、どれも実現してゆきたいものであり、一方看護教育の理念からみても、どれ1つとして否定されるべきものではなからう。しかしながら現状では、少なくとも、物言わぬ（自由記述欄に無回答である）学生を除いた、約半分の学生にとっては、これらの欲求を十分に実現させているとはいえないようである。

そこで、最後に簡単ではあるが、これまで述べてきたような学生達の欲求に応じてゆくために、現在の看護教育体制に関してどのような議論がなされるべきであるかと考えてみたい。

第1は、学生たちが指摘するように、現行の看護教育体制には時間的なゆとりのないことは事実であろう。このことは、何年かけて看護婦は養成されるべきかという国家のマンパワーポリシーとも関連するので、根本的な改善を急速には望めない。しかし、ゆとりは必ずしも時間の絶対的な長さだけに関連するものではなからう。限られた時間の中でいかに教育活動の質を高められるかとい

う工夫が大切な点といえよう。

第2は、第1の点を実現するために、看護教育に限らずあらゆる教育活動についても言えることであるが、教育内容の精選という点を十分に検討する必要がある。

また第3に、いろいろと難かしいこともあるが、専門の勉強と臨床実習との相互関連性を高める努力が必要とされよう。

第4に、理想論的にすぎるかもしれないが教育内容を、現実追隨的なものではなく、現実の看護活動を変えてゆけるような芽を育てるような教育活動はいかにしたら可能かという模索が必要とされているような気がする。

第5に、3年間の看護教育をそれだけで、看護婦という職業に対する完成教育と位置づけることはできないであろうし、専門的職業にとって重要なのは、現場体験の蓄積と卒後教育の充実ということであろう。学校をでてもこんなことも知らないというような需要側からの批判を恐れるあまり、具体的な現場体験の中でなら容易に理解できる事柄を断片化してつめこむような道ではなく、将来の体験や卒後教育を発展させてゆく上で基本的なものの考え方や技術・知識をしっかりと修得させるという点に看護教育の努力を傾けるべきであろう。

第6に、第5のこととも関連して、個々の学生が、自分のキャリア・プランに合わせて看護教育を位置づけられるような援助をする、いわゆる進路指導はどうあるべきかという点での検討が必要

であろう。

第7に、これまでの論点が、看護教育にかかわる教師・講師・指導者のあり方と大きくかかわっていることは論をまつまでもなからう。「教師は現場を知らない」とか「尊敬できる教師がいない」というような不満が書かれるようではいけない。いかにして看護教員の質を高めてゆくのかというのは重要な論点とならう。

第8に、これまでの結果の報告の中では、断片的にふれたにすぎず、本格的な解明は今後の課題ではあるが、看護学生の意識や行動に各人が属している学校の特性がいろいろな形で影響を与えていることがわかっている。学校にはそれぞれ校風とよぶべきものがあり、それらが、学生のもつ過去の進路選択のプロセス、将来の進路希望・進路計画あるいはパーソナリティと互いに密接な関連をもちながら一定の教育効果を上げていくのであろう。もし、学校と個人とにいわゆる相性のようなものがあるとするなら、そういったことを考えるための材料を看護教育にあたる者の方から、入学志願者達に積極的に提供してゆくことは、全体としてみれば、看護教育の充実に資するにちがいない。前にも述べたようにプロフェッションとしての看護婦の姿についてより正確で具体的な情報を提供するという点でも、志願者や将来の志願者に対して、どのような職業情報を流してゆくのかという点は検討に値することと思われる。

(1981・7・7・受理)

Career Planning of Nursing Students (Ⅲ)

Junpei Matsumoto *National Institute of Vocational Research*

Hideo Okamoto *Sophia University*

This research is planned to know the career planning of nursing students and investigate the relationships between their career planning and their college choices in high school days, and their attitudes toward nursing education in college days.

Two questionnaires were administered to 449 nursing students in 9 three-year colleges and 1 four-year college in Tokyo Metropolitan Area.

The first one was at their first grade (on the 2 months after entrance).

The second was at their third grade (on the 4 months before graduation).

This report is a part of all research reports, and deals the students' attitude toward nursing education and toward career planning after graduation.

The results are following.

1. 36% of students have answered that 'I am proud of being a nursing student'. However the number of students with pride at third grade is fewer than that at first grade.
2. 35% of students are satisfied with their life, but 40% are dissatisfied. The number of students with satisfaction at third grade is fewer than that at first grade.
3. In the daily life, most students have taken an interest in learning activities, and few are interested with private activities or social ones.
4. The students' self-estimate of degree of fitness to the life of nurse has tended to be decreasing.
5. Most students at third grade have had worse vocational images of 'Nurse' than those at first grade. Especially, at the aspects of 'social status', 'human relationships in the workplace' and 'speciality of job' they have had worse images.
6. Most students have planned a long-term employed working life.
7. 21% of students have agreed with the opinion that nurse is a kind of sacred occupations. But Most students are ambiguous. The number of students who think a nurse sacred at third grade is fewer than that at first grade.
8. After graduation, 63% of students have planned to be employed as a nurse. 24% have planned to enter a further educational institution to obtain qualification for a public health nurse or a midwife.
9. As far as decision-making after college graduation, 17% of students have made their choices before second grade, but 35% have in the first half of third grade. The students

planning to go to a school of higher grade are tented to make a decision earlier.

10. 59% of students have choiced a nurse as a longterm vocatonal goal, 18% have a public health nurse, 5% have a school nurse, 5% have a midwife.

11. In the nursing education, most students have been dissatisfied with 'teacher-leader', 'gen eral education', 'nursing practice', and 'professional education'.

12. Most students have said that 'the present nursing education is short of room for studying easily and building up one' s fine character'.

Then what professional socialization of nurse are and what nursing education should be are discussed.

July 7, 1981 received